

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884059

研究課題名(和文) 戦前期の北米日本人漁民をめぐる社会史的研究：共同体形成と太平洋漁業における役割

研究課題名(英文) Social History of Japanese Fishermen in North America: Commercial Fishing and Transpacific Community Formation, 1890-1948

研究代表者

今野 裕子 (KONNO, YUKO)

上智大学・言語教育研究センター・講師

研究者番号：10707623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦前のアメリカ合衆国カリフォルニア州における日本人移民の漁業・缶詰業に対する貢献と共同体形成の歴史に関する調査を行った。統計や聞き取り調査を通じ、他エスニック・グループとの共闘や緊張関係、また移民と故郷・和歌山県の村との物資や人的交流を通じた強い絆を確認することができた。さらに、日本人漁業家を排斥しようとする排日運動家たちの動機と、それに対抗する共同体の運動について経緯を詳らかにした。

研究成果の概要(英文)：This historical research focused on Japanese immigrant fishermen in pre-World War II North America, and particularly looked at the history of community formation on Terminal Island in Los Angeles, California. It further explored the issue of the anti-Japanese movement as it related to the exclusion of Japanese fishermen from the public waters of California. Through both quantitative and qualitative methods, I examined the ways in which immigrants maintained ties with their home villages, cooperated or conflicted with rival ethnic fishermen, and forged a new identity as Terminal Islanders that survived the war and the internment. I also delved into legal and personal documents to explain different motives behind the anti-Japanese movement, and how the Japanese as a community responded to such hostility. The overall findings of the research illustrate the formation of a unique, transpacific Japanese American community, and help to bridge a gap between immigration and emigration studies.

研究分野：歴史学

キーワード：移民史 漁業史 日米関係 日系人研究

### 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初、「共同体」という視点から見たアメリカ合衆国の日系人研究は日本人町や農業共同体の歴史を詳らかにするものが主流で、また日米間の移民研究者の間で交流や対話を行う機会は限られていた。一方で、国境をまたいで共同体を形成したり移動を繰り返したりする移民の生き様をおもに社会史的見地から描出する越境研究の実績が増えつつあった。本研究は農業に偏りがちな日系人史に厚みをもたらし、なおかつ最新の研究動向に沿った「越境」の視点から北米日系人史を見直そうという試みで、日米をまたぐ共同体の媒介として活躍した、第二次世界大戦前の日本人漁業家たちに焦点を絞った。たしかに移民漁業家については既に優れた研究が存在するが、それらはカナダやハワイ、メキシコが中心となっており、戦前のアメリカ合衆国本土において最大の日系人数を誇ったカリフォルニア州における日本人漁業家の実績は、学術的な考察の対象にされることは少なかった。本研究は移民史・漁業史におけるこの空隙を埋めることを目的とするとともに、調査過程でより積極的に北米の研究家と情報交換や成果共有を行い、適切な助言や提言を享受するだけではなく、自ら情報発信を行って、日米研究者の交流増進に寄与することも狙いとした。個人的にロサンゼルスや、近年盛んに移民史発掘に取り組んでいる和歌山県・太地町での調査経験があったため、この蓄積や人脈を活かしつつ、さらなる史料発掘や聞き取りを行うことにした。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、太平洋漁業における北米カリフォルニア州の日本人漁業家の役割と共同体形成過程を明らかにすることである。具体的には国勢調査をはじめとする統計やアーカイブ史料、聞き取り調査などをもとに、1910年代～1940年代前半までの同州における漁業共同体形成の過程を描出することを目標とした。日本からの移民送出やカリフォルニア州における日本人の定着、日系二世をめぐる問題、漁業や缶詰業の発展など、当初想定していた調査項目のほか、調べてゆくうちに日本人漁業家に対する排斥運動とそれに対する日本人漁業組合や領事館の工作・奔走に関する興味深い史料や研究を目にすることが多くなり、新たに排日運動の詳細を明らかにすることも研究の目的に加わった。このため、調査期間の後半はほぼカリフォルニア政界の動向、立法過程や日米外交史の研究とそれに関する史料収集が中心となった。

### 3. 研究の方法

公文書館や図書館所蔵の一次史料収集が中心となったが、電子データベースを使って統計を調べたり、関係者から聞き取りを行ったりして不足する部分を補った。以下の機関や

個人には特にお世話になった。

(1) カリフォルニア州立資料館 (California State Archives、米国カリフォルニア州サクラメント) : カリフォルニア州天然資源省が保有する一次史料 (戦前の外国人漁師や外国人保有漁船数などのデータ)、カリフォルニア州司法省・司法長官保有の一次史料 (太平洋戦争開戦後の日本人に関する報告) を収集した。

(2) カリフォルニア州立図書館 (California State Library、米国カリフォルニア州サクラメント) : 『サクラメント・ビー』紙や『サンフランシスコ・エギザミナー』紙などの新聞記事および排日パンフレットなどを収集した。

(3) カリフォルニア大学バークレー校バンクcroft 図書館 (Bancroft Library at the University of California, Berkeley、米国カリフォルニア州バークレー) : カリフォルニアの漁師が加盟していた労働組合に関する史料、排日運動家として有名な人物の個人文書、日系人収容に関する史料を収集した。

(4) カリフォルニア大学ロサンゼルス校リサーチ図書館 (Charles E. Young Research Library at the University of California, Los Angeles、米国カリフォルニア州ロサンゼルス) : 戦前に日本人漁村があったターミナル島に関するレポートや、漁師や缶詰業者が加入した労働組合に関する史料を収集し、またロサンゼルス領事館管区内に居住した日本人の個人データである「登録者カード」の閲覧と情報入力を行った。

(5) ロサンゼルス公立図書館 (Los Angeles Public Library、米国カリフォルニア州ロサンゼルス) : ロサンゼルス港湾委員会の出版物を閲覧した。

(6) ロサンゼルス法律図書館 (LA Law Library、米国カリフォルニア州ロサンゼルス) : 州議会議事録を閲覧した。

(7) ロサンゼルス港歴史資料館 (Port of Los Angeles Historical Archives、米国カリフォルニア州ウィルミントン) : ターミナル島・元住民への聞き取りの書き起こし原稿を入手した。

(8) ハンティントン図書館 (Huntington Library、米国カリフォルニア州サンマリノ) : 元ロサンゼルス市長 (フレッチャー・ボウロン) や元ロサンゼルス郡監督官 (ジョン・A・フォード) の日系人に関する覚書を入手した。

(9) 国立国会図書館 (東京都) : ロサンゼルス

で発行されていた邦人新聞『羅府新報』の記事を収集した。

(10) 外交史料館（東京都）：日本人漁師排斥運動や、北米の日本人漁業に関する戦前の外務省調査記録を収集した。

(11) 太地町立歴史資料室（和歌山県）：展示閲覧および史料収集、さらに地元の歴史家との交流も行った。

(12) その他個人からの聞き取り：元ターミナル島住民および現ターミナルアイランダーズクラブ会長へのインタビュー、また太地出身の戦後移民への聞き取りも行った。

#### 4. 研究成果

(1) 研究の主な成果：アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスに南にターミナル島という島があり、戦前ここでは多くの日本人が水産業に従事し、さながら日本の漁村を再現したかのようであった。彼らの事績はさまざまな伝承や回想、地域史の形で残されているものの、同州の農業発展に貢献した移民一世の功績に比べ語られる機会が少なく、学術的な考慮対象にもなりにくかった。もちろん農業に従事した日本人移民に比べて漁業従事者の数が少なかったことも原因だが、さらには戦前のロサンゼルス日系社会で政治力を持った移民一世が広島県や山口県出身の農家や商人を中心としたグループで、和歌山県出身者の多かった日本人漁業家の功績は相対的に矮小化されやすかったということも原因であろう。本研究ではこの空隙を埋めるため、ロサンゼルスにおける日本人漁業共同体の形成を、故郷とのつながりや他エスニック・グループとの関係性の中で社会的に考察することが出発点であった。初期の計画では北カリフォルニアの別の共同体についても調査する予定であったが、日本人移民排斥運動における漁業の位置を明らかにする必要を感じたため、途中から排日活動家とそれに対抗する日本人団体の調査に焦点を変更した。結果として、日米外交やアメリカ西部史という新たな枠組みの中で日本人移民漁業史を捉えることができるようになり、研究に厚みが出たように思う。以下、①共同体形成史、②漁業における排日運動の2点に絞って成果を簡単にまとめてみたい。

①共同体形成史：カリフォルニア州における漁業発展は20世紀初頭の缶詰マグロの開発から始まり、第一次世界大戦中の好況期を経て拡大を続ける。日本人が同州の水産業発展に貢献した背景には、漁業がもともと移民によって支えられていたこと、近隣の他州では外国人の漁が禁止されていたことなどがある。1910年代後半にターミナル島における日本人漁師数が爆発的に増え、1920年代を通じて漁業ライセンス取得者の数は全漁師

数の20%前後であったことが統計から裏付けられる。1930年代には島の一面である東サンピドロ地区において日本人の人口が97%に達した。そして、太平洋戦争開戦前夜の1940年代前半には、島で生まれた日系二世が漁業に従事し始める。これら二世を中心とした人々は「ターミナルアイランダーズ」という独特のアイデンティティを築き、真珠湾攻撃後の日系人収容という悲劇の中でもそれは失われなかった。

日本人は缶詰業にも貢献した。父親が漁師、母親が缶詰工場勤務者という家庭が当時多く存在した。しかし、このジェンダー・バランスも日本人以外のエスニック・グループでは異なり、たとえばメキシコ系やフィリピン系の人々の間では男性の缶詰工場勤務者のほうが多かった。工場内部の実態に関しては残された史料が少なかったが、統計や聞き取りなどから工場勤務者の生活パターンや、島の人口に占める割合（1930年で20%）などを知ることができた。

日本人は特にイワシやマグロの捕獲に関して特殊な技能を発揮し、このため後述するように缶詰会社に重宝され、排日運動にも有効に対処することができた。漁業活動や共同体の中心にあったのが日本人漁業組合で、白人漁師との紛争を解決したり、排日運動に対抗したり、時には白人漁師と共闘して缶詰会社に対する魚価交渉を行ってストライキを決行したりもした。このように、他エスニック・グループの漁師（おもにイタリア系、ダルマチア系、スラボニア系）とはうまく棲み分けをはかり共闘関係も築いたが、衝突もあり、排日漁業法案が州議会に提出されると裏で他エスニック・グループが法案を支持する動きを見せたりもした。1930年代には異なる2つの労働組織であるAFL（アメリカ労働総同盟）とCIO（産業別組合会議）の対立という要素も加わり、エスニシティによる反目が一層複雑さを増した。

一方で対立や苦労ばかりが共同体の歴史のすべてではない。ターミナル島の住人は故郷の和歌山県とのつながりを自然に保ち、物品を贈ったり盛んに帰郷したりするのみならず、子どもを教育のため故郷に送ったり、人的交流を大切にしたりした。また、特にターミナル島在住者の多数を占めた、東牟婁郡太地町出身者は、町が発行する特別な海外版『町報』を読むことによって、地元の活動に参画することができた。

このような特殊な環境（対立含みながらも比較的平穏な人種・エスニック関係、日本の故郷の村との強いつながり、日本人が多数派を占める人口構成）のため、太平洋戦争開戦により共同体が崩壊を余儀なくされたのちも、人々は島に根差した強力なアイデンティティを保ち続け、それがのちに「ターミナルアイランダーズクラブ」という同郷会の結成につながるのである。戦後は漁業の衰退、一世の高齢化などが原因で以前のような水産

共同体を再建することは叶わなくなったが、人々の絆は生き続け、現在でも太地町との交流がある。

②漁業における排日運動：カリフォルニア州における漁業発展に多大な貢献をしたのにもかかわらず、日本人漁業家は 1910 年代から 1940 年代にかけて常に排斥の対象として排日活動家から敵視されることが多かった。しかし、日本人農家が外国人土地法によって農地所有を禁止され大きな打撃を受けたのに対し、排日漁業法は実際にはなかなか成立せず、議会を通過したものにも裁判では違憲判決が下された。特にイワシ漁を得意とした日本人漁業家は缶詰会社に重宝されており、これら企業が日本人の支援に回ったことで法案が通過しにくかったことが原因であると考えられる。それにもかかわらず、また 1924 年には日本人移民が完全に入国禁止となって移民排斥闘争が一段落したにもかかわらず、排日活動家たちが何を思っただけで漁業法案を提出し続けたのか探ってゆくうちに、時代の流れと国際関係の変化に伴う、排日動機の変遷を辿ることができた。

1920 年代前半、すなわち 1924 年移民法前夜までは名うての排日家たちがあるときは表に立ち、しかしもっぱら他の議員を支援するという形で、漁業法案通過に向けた活動を行った。彼らの最終目標は日本人移民の完全追放であり、日本人から漁業ライセンスを取り上げればその第一歩を踏み出せるという計算があった。外国人土地法や移民法のとこのように大々的なキャンペーンこそはなかったものの、政治的便宜性や私利私欲とは関係なく、アメリカの産業をアメリカ人のために守るという名目で裏工作を行った。しかし、1924 年移民法成立により彼らの漁業問題に関する関心は薄れ、その後は工作から撤退する。

大物排日家たちの跡を継いだのは、金銭目的で漁業法案を次々と提出する腐敗した州議員たちであった。彼らはたとえ日本人に偏見を抱いていたとしても漁業からの日本人排斥にそこまで熱心ではなく、自らの提出した法案を委員会で握りつぶさせる約束を餌に、缶詰会社から賄賂を受け取っていた。しかし、稀に法案が通ってしまうこともあり、日本総領事館や日本人漁業組合は親日家のアメリカ人と協力し、対抗活動に奔走した。これら親日家の中にも日本政府から金銭を搾り取ることが目的の仲介者もあり、1920 年代後半から 1930 年代半ばまでは、単純な人種主義だけで割り切ることのできない、私欲の絡んだ法案が繰り返し提出された。

1930 年代半ばになると、日本の満州侵攻により逼迫する国際情勢を受けて、国防論を盾に排日漁業法案を通そうとする者が現れた。日本人の乗り組んだ漁船が危険であるという議論自体は古くからあったが、この時期には具体的な証拠を添えて連邦下院非米活

動委員会（破壊活動を調査する委員会）で証言をした人物が、排日漁業法案成立に向けた運動で大きな影響力を持った。同時に日本人所有漁船の摘発も行われた。排日家にとっては漁業法を成立させる絶好の機会であったが、結局実際に法案が通過するのは真珠湾攻撃によって日米の衝突が決定的になるのを待たなければならなかった。そしてこの法律にも、戦後に最高裁によって違憲判決が下された。こうして日本人漁業家を対象とした排日運動は幕を閉じる。

以上の研究成果から見えてくることは、一口に排日運動といっても様々な動機をもった異なる背景の人物や団体が介在しているということであり、従来の排日運動研究で指摘されてきた人種主義や政治的便宜性といった要素を含みつつも、金銭欲や国防に関する懸念など、漁業法案ならではの要因が運動の背景に存在したことは注意に値する。また、漁業組合や総領事館など日本人側もさまざまな策を練ったり、排日家と直接対峙したりするなど、共同体として問題解決にあたっており、決して受け身の被害者ではなかったことが調査の過程で明らかになった。

(2) 国内における位置づけとインパクト：ターミナル島の日本人共同体形成史については、和歌山県太地町で催された展示会なども既にあり、また学術的なものはまだ少ないにせよ著作や調査報告もいくつか存在するので、本研究はそれらの情報に統計的な側面を付け加え、なおかつ越境研究やエスニック研究の視点から新たな枠組みを提供したことにより意義があると考えられる。また、これまであまり注目されてこなかったカリフォルニア州排日漁業法案に光を当てたことで、差別する側の心理や動機およびそれに対する日本人共同体の反応の変遷を詳細に辿ることができ、排日運動研究に新たな視座を提供し得るものと考えられる。

(3) 国外における位置づけとインパクト：北米における越境研究、移民研究において漁業に関する調査はこれまでほとんど学術的になされてこなかった。環境史や法制史の局面から書かれた研究書は存在するが、共同体形成や排日運動の枠組みから考察されたものはほとんど存在せず、本研究はアメリカ西部史、アジア系アメリカ人史などの研究者に新たな視点を提供できる。既に 2015 年 3 月の国際シンポジウムで成果の一部を発表し、画期的な質問や指摘を受けた。日米間の学術交流という意味でも本研究が今後果たす役割は重要なものとなり得るので、さらに内容を深化させ議論を深めてゆきたい。

(4) 今後の展望：今後はさらに太平洋をまたいだ人、技術、物、そして思想の流れをテーマとして研究を深化させたい。具体的には、漁業技術や漁具といった移民に伴って海を

渡った資源の動きを追ったり、海を生業とする人々の流れを見ることで、アメリカ西海岸だけではなくより広範囲に影響を与えた人や団体の動きを調査したりすることが可能である。これらのテーマを突き詰めることにより、アメリカ史や日本史といった従来型の国民国家枠に収まる歴史を超えた、開放的、重層的で、人々の生活に根差した歴史を描き出し、歴史教育の場でもこのような視点による研究成果を積極的に提供してゆきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 今野 裕子, “‘Localized’ Problems of National Consequences: Exclusionist Discourse about Japanese Fishermen in Southern California, 1907-1948.” (国際シンポジウム) Transpacific Convergence: Studying Nikkei and Race in the U.S. and Japan. 2015年3月23日、ロサンゼルス(アメリカ合衆国)
- ② 今野 裕子, “Wakayama Emigration in Context: A Local Response to Global Forces” (英語での発表). 日本移民学会、2014年6月29日、和歌山大学(和歌山市)

[図書] (計 1 件)

米山 裕、河原典史 編著、文理閣、日本人の国際移動と太平洋世界—日系移民の近現代史一、2015、318 (163-189)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

今野 裕子 (KONNO, Yuko)  
上智大学・言語教育研究センター・嘱託講師  
研究者番号：10707623